花祭り

愛知県奥三河からさらに内陸へ入り、天竜川水系の長野・静岡にかけての花祭りは、民俗学の宝庫である。

一般にはほとんど知られていない、いわば歴史の冷凍庫に保管されフリーズされた祭だ。が、私は柳田国男の「日本の祭」から始まり、折口信夫の著作を読むうちにこの花祭りこそ、古層に刻み込まれた日本人の本質にかかわる祭だと認識するようになった。

現在私が傾倒している人類学者中沢新一さんの表現を借りると「古代から来た未来人」である折口は、この花祭りを静かにじっと観察し、完全に縄文の時空間に埋没していったという。

花祭りを別名霜月祭という。冬至こそ生命力のターニングポイント。夜の長さが逆転し、この日を境に太陽の力が復活する。私の自宅近所に３世紀構築の東ノ宮古墳がある。真東から昇った太陽光が、埋葬された死者の部屋に一筋差し込む冬至の初日の出をこの古墳から拝んだことがあるが、古代人は、冬至こそ太陽の復活と共に人の生命力も蘇生することを祈ったに違いないし、そこに太陽と大自然の霊力に畏怖したに違いない。

花祭りには神を意識する様々な仕掛けがあるが、最大のドラマは湯立て神事ではないか。祭場に火を焚き、釜で湯を沸かす。水、火、酒、米、土などは日本の祭を記号化する代表だが、水を火にかけ煮えたぎらせることによって生命の沸き立つイメージは容易に想像されよう。この沸き立った湯を群集にかけるのだ。更に、神楽が我々を古代へ誘う。音はプリミティブな太鼓と笛だが、唄が長々と入る。祭の資料で台詞を読んだが、この唄こそ文字を持たない縄文人の言葉かもしれない。踊りも長々と続く。最初、踊りを見てEXILE が浮かんだ。今も昔も人間は踊りたいんだ。縄文と平成の表現の違いだけなんだと我田引水の評論を下した。夜も更け祭のドラマはだんだん興奮の度を深め、仮面をつけた鬼、翁、おかめ、女郎、獅子舞が登場する。舞踊から演劇の世界が始まる。メタファーとしての神々は誠に人間臭く、愉快だ。

奥三河には現在１５の花祭りが残っているが私は人口１２１７人の豊根村の、今日いう限界集落「下黒川の花祭り」を見に行った。私に祭の案内状をくれたこの集落に住む坂本健太郎さんは豊根村役場総務課の公務員であり、消防団員であり、祭神楽の主役だ。彼の子供も神楽の小役を務め、母親は裏方に回り参加者や見学者の接待係と部落中が２役３役勤める全員参加。下黒川の花祭りは正月2日の夕方から始まり夜を徹して4日の明け方まで休むことなく延々と続く。坂本さんに言わせると、自分の体に神様が宿らないととても持たないという。この、夕方から始め夜中に神事を行い翌明け方終わるというのが日本の祭の基本形であり、神事に始まり神事で終わる花祭りは八百万の神世界であった。

写真：デン真（上黒川の花祭）